
スパイシー・スパイダー

幻想人形

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スパイシー・スパイダー

【Nコード】

N7150D

【作者名】

幻想人形

【あらすじ】

家に帰ってきて青年は驚いた。自分の部屋に、とても美しい少女が不法侵入していたのだから。青年は怒鳴り、少女はポヤーンとそれを受け流す。これは、そんな二人の愛と笑いと涙のドタバタ・ラブコメディーである。

序笑

どうしてこんな事になったのか全く理解できない。

なんだ、このありえない状況は……。

青年は困惑していた。狭苦しい6畳ほどの部屋の中、青年はこの非現実にとただただ沈黙し、目の前にいる少女を黙ってみているしかなかった。

彼が変な目で自分を見ているのが少女には不安に思えたのか、少女は戸惑った表情で青年を見つめていた。

そんな顔で見られても困るのだが……。

青年は自然と少女から目を逸らした。

「あの…… どうして、お顔を逸らされるのですか？」

少女がゆっくりとした口調で、オズオズと青年に問いかける。

青年はその問いかけに沈黙で返す。

と、こんな平和な会話から青年の非日常は始まった。

これは、ゲームやパソコンにしか興味を示さなオタク青年と、ドジッ子少女（？）が織り成すちよつと変わった物語である…… かもしれない……。

第一笑ゝ触らぬ蜘蛛になんとかやゝ

「なんだよ……。お前は」

鋭い冷たい瞳で、容姿端麗な青年が何かを睨みつけ問いかけていた。
着替え途中なのか、ワイシャツがはだけて白い肌が見えている。

ある日の事である。青年事、トウドウ藤堂 ヒジリ聖の視線の先には一匹の蜘蛛が
畳の上に乗っかっていた。

「とつとどつか行け、さもなくば潰すぞ……」

聖は冷たくそう言い放った。

蜘蛛に声かけている辺り痛いと思うが、まあ一人暮らしだから気が
ふれたとでも考えて、その辺は突っ込まないで置いてもらいたい。

だが、蜘蛛は蜘蛛。聖の言っていることが理解できているはずもな
く自分がいる所から動かない。

聖はイライラとし始めて、このまま踏み潰してやろうかと、足を少
し浮かせた。

それでも、蜘蛛は動こうとしない。なんというか、自分が危険とい
う事が分かっているようだ。

聖は、足を降ろそうとして……

アホらしい……。何を蜘蛛ごときでイライラしているのだろう。

……そういえば、朝蜘蛛は殺すべからずというしな
と、思いと止まり少し考え、「トロイ奴だ……」

顔をしかめてそう呟き、そつと蜘蛛へと手を差し伸べた。

蜘蛛は何の警戒ももなしに聖の手にひょいっと乗った。蜘蛛を
手に乗せたまま聖は窓まで行き蜘蛛をそつと窓の棧の所に下ろした。
蜘蛛は聖の手からそろそろ八本の足を動かして本当にゆっくりした
動きでのろのろと下りた。

なんだこの蜘蛛は本当にトロイ……。聖はまたいららし始めた。

完全に聖の手から下りた蜘蛛は何故か、聖のほうを向いて、彼を見
つめた……。ように見えた。

「なんだよ。ささつと出て行けよ……」

言葉が通じたのか、蜘蛛はクルリと向きをかえ、窓の外へと遅い動
きで出て行った。

蜘蛛が完全に出て行くと、聖はぴしゃりと窓を閉めた。

そうして、自分がまだきちんと着替えていないことに気が付き、開
けっ放しになっているワイシャツのボタンを閉めた。

全く、とろい蜘蛛のおかげで時間を食った……。あの蜘蛛この先絶対
長生きしないぞとか、思いながら、聖はちらりと時計を見る。

時刻は7:50を示していた。

まずい、このままでは遅刻する……。聖は慌てて、鞆に教科書を詰め、部屋を飛び出した。

階段を駆け下り、自転車置き場へと向かい、自転車に跨りぐつと足に力を入れペダルを漕ぎ出した。

このまま飛ばせば、20分位で学校に付くであろう。聖は余裕な表情を浮かべて自転車を漕いだ。

そうして、20分後……聖の計算どうり学校についてしまった。

自転車をいつも隠している路地裏に隠し、嚴重に鍵をかけ聖は校門へと向った。

間に合って当然みたいな表情を浮かべ数多い生徒達の中にまぎれて聖は校門をくぐる。

下駄箱に靴を入れ、上履きに履き替え教室に向う。

ガラガラと扉を開け中に入る。

騒いでいる生徒達を横目に、聖は自分の席に着いた。

「おはよう」

と、目の前に一人の少女が顔を覗かせる。

桃色の短い髪の毛の端っこをヘアピンで留め、大きな団栗眼と人懐っこそうな笑顔を浮かべた、決して美人ではないが、可愛らしいという印象を受ける女の子が目の前にいた。

聖は感情無しに「ああ」と答える。

少女は、少し不満だったのか頬を膨らませ聖に告げる。

「もう！ ちゃんとおはようって言ってくれてもいいじゃない！」

聖はうざったそうに、少女を見つめ……

「うるさい。どうだっていいだろう。全くどうしてお前は僕にそうかわりたがるんだ？」

少女は更に小さな顔を膨らませ、くりくりと可愛い瞳で聖を睨み、

「お前じゃない！ モモヤマ ナギサ 桃山 渚って名前があるもん！ 聖の馬鹿！」

少女、渚は聖の事をばしばしと軽く叩いた。

その行動を、軽く受け流しだるそうに渚へという。

「ああ……はいはい。わかった、わかったよ。挨拶すりゃあいんだろう？」

聖はだるそうに、そうしてあまりにも爽やかじゃない低い声で……

「……おはよう……」

と、呟いた。

その声に、渚は「……。」となった。

それと同時にチャイムが鳴り響いた。

今日もくだらなく無駄な時間が始まると、聖は密かに思った。

時間は流れ、昼休みになった。

購買で買ってきたこっぺパンを取り出し、口に持っていこうとしたときだ。

「ひーじりー！」

わっとでも言いそうな勢いで、渚が耳元で大声を張り上げた。

「だあああつ！！　うるさいな！　なんだよ！　一体！」

「わわっ！　ごめん……。でも、聖が寂しそうにお昼食べてるから、一緒に食べようと思って……」

さすがに大声を出して悪いと思ったのか、渚の声は小さかった。

しかし、聖は容赦なくそんな渚を責める。

「余計なお世話だ！　僕は一人がいいんだっ！　全く、お前の無神経にはほんと困る……。いくら、幼馴染だからってもう少し遠慮つてもものをおぼえろよな」

聖はこめかみを抑える。すると、渚は瞳に涙を浮かべてポツリと呟

いた。

「…………ごめんなさい…………」

聖は少し瞳を見開き、しかしすぐに冷淡な顔に戻して渚を静かに見つめた。

「…………分かったなら。友達のところ戻れよ…………僕の所にいても、お前を泣かせるだけだから…………」

渚はコクリと頷き、涙をぬぐい先ほどの涙が嘘のように明るい花のような笑顔で友達のもとに戻っていった。

聖は、何故か寂しそうな瞳で…………「なんだ聖、まゝた渚ちゃんのお誘い断ったのかよ」

いきなり話しかけられて聖は、椅子から転げ落ちた。

声の主はそんな聖を不思議そうな顔で見つめた。

「うん？　なにやってるんだ？」

聖は立ち上がり、溜息を吐き出し、目の前のいかに軽そうな男子を一瞥した。

そうして、ポツリ…………

「…………また無神経なヤツが一人…………」

聖は疲れたように呟いた。

「ん？ 何か言ったか？」

「いや、別に……。それよりなんのようだ、加賀屋」

軽そうな青年事、加賀屋^{カガヤ} 一誠^{イツセイ}は、ニヤリといやらしい笑顔を浮かべ席に戻った聖にのしかかりつつ耳元で囁いた。

「全くお前も隅に置けないなあ〜」

加賀屋はニヤニヤといやらしい笑いを聖に向けた。

「はっ？ 何のことだよ」

聖はわけが分からないといった表情で、加賀屋の顔を手で押しのけ離れさせる。

「この高校のアイドル、容姿よし、性格良しの渚ちゃんのお弁当食べよ！ のお誘いをああも簡単に断るとは……。聖、お前も隅に置けないなあ〜」

「うるさいなあ……」

聖は、そう小さく呟き食べるのを忘れていたコッペパンを齧った。

「加賀屋には関係ないだろう。それに渚とはただの幼馴染だ」

聖は言い切る。加賀屋は目を大きく見開きワザとらしく驚いて見せた。

「お前……気が付いてないのか？」

聖はコッペパンを食べ終わったためか、お茶をストローですすりつつ、加賀屋に尋ねた。

「何がだよ」

「女の子が、一緒にお弁当食べようって言うのは一つしかないだろう？」

「だからなんなんだよ？」

加賀屋は、はあつと溜息を付き顔に手を当てた。今にもオーノーとか言い出しそうだ……。

「まあ、いいや……いずれ分かるさ」

加賀屋は聖の肩をぽんぽんと手の平で叩いた。

聖は最後まで「？」な顔して、首をかしげた。

さて、放課後になった。聖は素早く教科書を詰め込み、掃除もそこそこに教科書を飛び出した。

「ちょっと、聖！ 掃除はあゝ！」

「そんなの、お前等がやっておけばいいだろう……。僕はやりたくないからな」

「聖い……！！　ちよつと！！　待ちなさい！！もう……」

走り去り、見えなくなった聖に、渚は溜息を吐いた。

聖は自転車に飛び乗り、意気揚々と漕ぎ出した。彼がこんなニコニコしているのは珍しかった。

いや、むしろ気持ちが悪いこと限り無しである……

ともかく、聖は家にこもることを至福の喜びとしていた。そう、彼はいわゆるヒッキーなのだ。

家の中にこもり、パソコンをやる。適当に生活して適当に過ごす。

おかげでご近所さん関係は最悪。会っても挨拶一つしない。まさに駄目人間を体現したような中身が彼の全てだった。

容姿はいいのに……なんて事をナレーションに思われてるとはつゆ知らずに聖は家につく。

自転車置き場に自転車を置き、階段を上がり自分の部屋の前に来る。

鍵をあけようと、鞆を弄り鍵を探す……と……。

ガチャリと、何故か鍵が開いた。

「????」聖の頭に沢山の？が浮かぶ。

なんだ？ 何故鍵が勝手に開いたのだ？ 泥棒か？ いや……泥棒なら、逃げるか居留守を決め込むはず……。では、何故鍵が開いたのだ？

扉を開けるのが憚られる……。しかし、入らなければゲームもパソコンも出来ない……。

そうして、思いなおす。

（何を遠慮しているのだ。ここは僕の家ではないか……。そもそも何故得体の知れない他人に僕が遠慮などをしなければならぬのだ。）

聖の脳内では恐怖より、パソコンとゲームへの愛情が勝ったようだ。素晴らしいオタク魂だ。と、ナレーションがあきれていつても聖にはどうせ伝わらない。

聖はいつものように、王様たる堂々とした態度でノブに手を掛けた。

扉を開くと一声、

「誰だ！ 勝手に僕の部屋に入り込むやつは！」

怒鳴った。

と、だれも居ない……。

「あれ？」

何故だれも居ない。聖がキョロキョロと部屋を見回す……。そうして

下を見た。

何かが丸まっている。それはどうやら、正座をして頭を下げているようだ。

聖はというと……。

「誰だお前は！」普通に怒鳴った。もう少し、驚いたり出来ないのであろうか……。

その人物は顔を上げずに、慎ましやかなる口調で、
「お待ちしておりました……聖様」
そう呟いた。

聖は突然自分の名前を呼ばれ、言葉を失った。

そりゃ、突然知らない人物に自分名前を呼ばれたら驚くであろう。

謎の人物はゆつくりと、背景があるなら桜が舞いそうなどとしてもしなやかな動きで顔を上げた。

それは、とても美しい少女だった。長い髪を一つの団子にまとめ、金色の豪華な装飾の蜘蛛の巣を象った簪を挿しており、夕日のような紫色のこれまた蜘蛛の柄が刺繍されている高そうな布で出来た着物を着た、可憐な少女が可愛らしいほほ笑みを浮かべて聖を見つめていた。

聖は一瞬でこの少女に惹かれた。さっきまでの態度が嘘のように、今は大人しい。

「お待ちしておりました……聖様……」

少女の声で聖はハッと我に返った。そうして、驚きとともに、
「うわあああああ！！　だ、誰だお前は！！」

飛びのきつつ、一度外に出て、そつと扉から覗いて、指をさして叫んだ。

そう、それが正しい反応というものだよ青年！

少女は、大きな声が驚いたのか、困った顔をしてまた頭を下げた。

「も、申し訳ありません！　私ったら聖様を部屋にお通しもせず、どうぞお入りくださいませ。聖様……」

おしとやかに端によけ、ニコリと聖を家の中に促す。

「お前に言われなくても入る！　ここは僕の部屋だからな！」

驚きもすぐに薄れ、聖は元の優しさのかけらを全く持つて感じさせない傲慢な態度に戻り、靴を無造作に脱ぎ捨て、ずけずけと部屋に入る。

そうして、鞆をその辺に放り投げどんと、座り込んだ。

少女は、幻覚の桜をヒラヒラ舞わせながら、聖の前に淑やかに正座した。

つつけんどんに聖は少女に尋ねる。

「それで、お前誰なんだよ。僕の部屋に勝手に入り込みやがって…
…なんだ、ストーカーかお前は」

いくら、部屋に勝手に侵入されたからって初対面の少女をいきなりストーカー呼ばわりとは、デリカシーも何もあつたようなものではない。

少女は何かに気が付き、まあとばかりに口元に手を当てまた深々と頭を下げる。

「も、申し訳ございません！ 私ったら、ぼんやりしていて……自分の自己紹介もしていませんでした！」

聖はウザそうに少女を見つめ。きつい口調で少女に言った。

「謝罪はいいから、早くお前が誰か説明しろ……」

「は、はい」

少女は一呼吸おき、

「私、女郎 詩紅母^{ジョロウシクモ}と申します。このたびは命を助けていただいた聖様にご恩返しをしたくやってまいりました」

少女、詩紅母は大人しい口調で言った。

「は？ 恩返し？」

聖の頭に再び？が舞う。

こんな、女を助けた覚えは自分には無い。この女は何を言っている

のだろうか？

詩紅母と聖の間にビュウツと風が吹き、そうして沈黙。

詩紅母がオズオズと聖に尋ねる。

「あ……あの……覚えてらっしゃいませんか？」

聖は即、頷く。

詩紅母にガンと背景が桜から雷に変わった。

およよと詩紅母はしくしく泣き出した。何故か幻覚の桜をまわせて

「ひどいでございます、聖様……」

「酷いといわれても知らないものは知らない。大体お前どうやって僕の部屋に入り込んだんだよ！ 鍵は掛けてあったはずだぞ！」

詩紅母は泣くのをぴたりとやめやんわりと微笑み、

「それでしたら、そこから入りましたわ」

詩紅母は何故か開いている窓を指さした。

聖は示された場所を見て、ピシリと怒りマークを浮かべた。

「ふざけてんのか！ ここはアパートとはいえ3階にあるんだぞ！それを昇ってきたなんて信じられるか！ 嘗めているのかお前は！」

詩紅母はびっくりと身体を震わせ、聖を怯えた瞳で見つめて弁解する。

「だって、本当なのですよ！ 私は、本当にそこから入ったのでございます！」

それが本当なら、真実はどうあれ立派な不法侵入だと思うのだが…
…この、お惚け天然少女にそんな考え露も考えていないようだ。

必死に説明する詩紅母に、聖はだんだん頭痛が痛くなってきた。

「お前……それを僕に信じろって言うの？」

疲れたような声音で、詩紅母にそう問う。

「はい！ 信じてくださいませ！」

詩紅母は強く主張する。

聖は思った。駄目だ、この女頭がいかれていると。

しかし、詩紅母は真剣である。

聖は溜息をつき。

「ああ……分かった……お前のいう事信じてやる……」

一言そういうと、詩紅母の表情はぱつと明るくなった。

「本当にございますか！」

聖は、珍しく明るい笑顔を湛えて、「ああ！」と答えた。

「ありがとうございます！」

詩紅母がぺこぺことお辞儀をしている間に、聖はニコニコと電話に手を伸ばし……

110……とボタンを押す。

そうして、笑顔から無表情に戻し……

「もしもし、警察ですか？ 何か、変な女に不法侵入……」

詩紅母が慌てる。

「わああああ！！ 警察に通報しないで下さい！」

電話を奪い取り、誤魔化して電話を切った。

「ひ、聖様何をするのでございますか！」

「ちっ……」

聖は本当に残念そうに舌打ちした。

詩紅母は眉毛を少し吊り上げ、聖に初めて怒った口調で話しかけた。

「もう！ 聖様は、私が誰だか本当にお分かりにならないのですか？」

聖はイライラしていたが、こいつに怒っても疲れるだけだと、落ち着けと自分に命じ冷静な口調で、彼女に言った。

「だから、何度も言うが……僕はお前が誰かなんて分からない……」

詩紅母はハアツとでっかい溜息をはいて、肩を落とし、仕方ないという風に、

「分かりました……本当は元の姿に戻るの嫌なんですけど……」

今度は何をやる気だ。本当にこの女は得たいが知れない。「今度は何をやる気だ……」そう言おうと口を『こ』の字に開けようとしたときだった。

ハラリ、パサツ……

何か布が床に落ちる音がした。聖は自然と音のした方へ視線を向けた。

そこには、紫の着物が落ちていた。

ん？ これは先ほどまで詩紅母が着ていた服ではないか？ 確かに、この蜘蛛の柄の着物は詩紅母が着ていたものだ。

では、今詩紅母はどうなっている？ 着物を脱いでしまったのでは、もちろん下着だけになっている……そこまで考えて、聖は顔をカツと上気させ、

「バ、馬鹿！ いきなり服を脱ぐヤツがあるか……！」

とつさに後ろを向いた。それと同時に困惑も。

一体本当にこいつは何なんだ！ やはり、警察に連絡するか？ 不法侵入と猥褻容疑で……。

とか思いつつも、自然と首が後ろに。女というものが縁がないせい
か、やはり気になる身体の構造……。

しかし、理性がそれを留める。

ここからは、聖の脳内の会話である。

『ダメだ聖！ 何をしているんだい？ ここは大人しく警察に連絡
して、彼女を引き取って貰うのが今するべきことではないのかい？』

聖の理性。聖天使の弁解である。

『何馬鹿なこと言っている。ここは、保健のお勉強という事であの
女の観察をすることが男として正しい、今すべきことだ！』

聖の本能。聖悪魔の意見である。

『こんな奴の意見を聞いてはダメだ聖！ 君は清く正しいオタクな
青年だろう！ 女の子の身体なんて、PCの18禁ギャルゲーだけ
にして置きたまえ！』

天使なのに、発想がオタクである。ま、聖だからね。

『あんな、バーチャルを見て何が楽しい。聖、男だろう！ ちょっ
と振り返れば済む話だろ？』

悪魔が耳元で甘く囁く。

そうそう、振り返れば和風美人が……

『聖！　しっかりしろっ！　ダメだ！　悪魔に唆されちゃ！』

聖天使が髪を引っ張り、まわしそうな首を何とかもとの位置に戻す。
ハッ危ない危ない。

『見ちまえよ？　減るものじゃないだろう？』

悪魔も聖の髪を引っ張り始めた。

『邪魔するな！　このいやらしい悪魔め！』

『そっちこそ！　聖の大人への階段を邪魔するな！　このむつつりスケベが！』

『誰が、むつつりだ！　いいから、その手を離せ！』

『ギャルゲーをやること自体がむつつりだ！　お前こそ手を離せ！』
天使と悪魔が壮絶なる口げんかをしていると、詩紅母の声がかかった。

「聖様、こちらを向いてください」

悪魔が天使にニヤリと微笑む。

『ほら。女の子からのお呼びだぜ？』

天使は顔をしかめ、悔しそうにうぐぐ……とか、うめいた。

『し、仕方ない。彼女が呼んでいるのならば……』

天使が手を離す。

と、そこで二人の会話は途切れた。

現実に取り戻された聖は、どきまぎしながらも、ゆっくりと首を回した。

そこには裸体の美少女が……っ！！　なんてことはなかった。

それよりも、もっと驚くべき自体がこの狭苦しい6畳間で起こってしまった。

なんと、詩紅母が消えていたのだ。

「なっ！　き、消えた??」

こんな、マジカル展開がこの現実起きていいのだろうか？　しかも起きてしまったのだから仕方がない。

そんなことより詩紅母だ。彼女はどこに消えたのだろう……辺りをキョロキョロ見回すと、突然詩紅母の憤まじやかなる声が響いた。

「聖様、此処でございますわ」

此処？　此処ってどこだよつと、下を向いた瞬間にそれは居た。

なんていうか……蜘蛛が居た。畳の上にちょこんと、小さい蜘蛛が乗っていた。

「蜘蛛……?」

聖が小さな声で呟いた。それと同時に朝の出来事が思い起こされた。そういえば……朝に一匹蜘蛛を助けた覚えが……。

どこことなく、朝の蜘蛛に似ているような……そうじゃないような……。と、また詩紅母の声が響いてきた。

「お分かりいただけましたか?」

その大人しい口調に、聖はまさかと思った。

突然、身体にいいようなない寒気を覚えた。

聖は、震える口調で、咽から搾り出すように、一語一語区切って尋ねた。

「ま、まさか……お前は……あの時……助けてやった……」

詩紅母の声が肯定する声を上げた。

「はい。その時のトロイ蜘蛛にございます」

その明るい声は、やはりこの蜘蛛のほうからした。

サーッと聖の身体から血の気が引いた。聖の心に吹雪が吹き荒れた。

その吹雪によって、聖はものの見事にカチコチに固まった。

「あ、あの……聖様……？」

詩紅母の困り気味の声が聖の名前を呼んだ。

固まりながら、聖はこんな事を思ったそう……ああ、助けるのではなかったと、あの時素直に潰すべきだったと……。

第二笑　彼女の生態

蜘蛛……。節足動物門鋏角亜門クモ綱クモ目に属する動物の総称。網を張り、他の虫を取ることで一般的に有名な動物である。

聖は、パソコンで蜘蛛について調べていた。というのも……聖は首を少し後ろに向け、今台所で悠々と夕食を作っている一人の少女を見つめた。

彼女の名前は女郎　詩紅母。

見目麗しく、誰に対しても丁寧な口調で話す、大和撫子な少女である……が、先日衝撃的な出来事があった。

今でこそこうして、聖の狭い心を何とか妥協させて一緒に暮らしてはいるものの、実はこの少女何を隠そう驚くべき事に、真の姿は蜘蛛なのである。

詩紅母は、聖の視線に気がついたのか、ニコリと微笑んだ。

聖はすぐさま、フィットと顔をパソコンのモニターに戻した。

さて、この章ではこの少女がいかにこの根暗で性根が悪く、無愛想で、優しさという感情を持たなく、彼女居ない暦17年のこの聖という少年を妥協させたかをお話しよう。

話しは二日前にさかのぼる。

（二日前）

「結構だ！ 出てけ！」

「そ、そんな事言わないで下さい！！」

詩紅母は泣きながら聖の足に飛びついた。

状況を説明しよう。今詩紅母は聖によって、外に追い出されようとしていた。

「私、今追出されたら行くところ無いのです！！」

詩紅母は必死に聖にしがみついている。

「だああっ知るか！！ 離せ、化け物！！」

聖は、必死に詩紅母を追出そうとしている。本当に優しさの「や」の字もない。

「どうして私を嫌うのですか？ 蜘蛛だからですか！？」

詩紅母はうわん、うわん泣きながら聖にすがりつく。

「それもあるが……。僕は、今まで通り楽しくゲームやパソコンを一人でやって過ごしたいんだ！その生活をお前のありがた迷惑でぶち壊されたくないんだよ！」

自分の自堕落な生活を守るために、いたいけな行く当てもない哀れ

な少女を追出そうというのだ。

ほとほと冷酷な人間である。

ああ、かわいそうな詩紅母ちゃん！

「お願いします！　なら、聖様のお邪魔をしないようにしますから！　ですから、お側に居させてください！」

「だから、居るだけで迷惑なんだよ！」

「昨日は止めてくれたではありませんか！」

「あれは、お前が蜘蛛の姿で部屋の中を逃げ回ってただけだろう！　！」

どうやら、昨日もこれと同じ状態になっていたらしい。

昨日は聖が負けたようだ。

「お願いです聖様あゝ！　私を助けてくれたのは貴方だけなんですうゝー！！」

「はっ？　どういことだよ？」

聖は足を止める。その隙に詩紅母は素早く部屋の中に入った。

「よしっ！」

「あ、きつたねえぞ！！」

聖は怒りにわなわな指を震わせて、詩紅母を指さす。

「汚くなどありません。それに今のは本当の事です！」

詩紅母は着物の埃をはたきながら言った。

聖はもうめんどくさくなって、ドカッと畳の上に偉そうに座った。

詩紅母も聖の前に楚々と座る。そうして、詩紅母は芝居がかった口調で勝手に身の上を話した。

それと同時に何故か照明がパッと落ちた。

聖はいきなりの事に驚いた。

「な、なんだ？　なんで電気が……」

と、何故かスポットライトみたいな明かりがパッと詩紅母を照らした。

「なんで、うちにスポットライト？」

そんな聖の疑問は無視して、詩紅母の物語は始まった。

「最初に、私はこの世界の生物ではありません。驚かないで下さい……なんと……私は……魔界の生物なんです……！」

「ま、魔界？」

突拍子もない世界が出てきて聖の額からは冷や汗が……。

「そうなんです。あ、でも勘違いしないで下さいね？ 人間さんたちが住むこの世界を征服したり、壊したりするきはありませんので」

詩紅母は手を振り振り、自分がこの世界に無害であることを示す。

「じゃあ、お前は此処に何しに来たんだ？」

聖がそう尋ねると、詩紅母はよくぞ聞いてくれましたとばかりに泣きながら、聖にズズツと近づいた。

「うう……聞いてくださいよ聖様アゝ！！！」

「うわア、びつくりした！！いきなり近づくな！ びつくりするだろうが！」

心臓をバクバクさせ、聖は怒鳴る。おいおい青年。そんなにいつも切れていては長生きできないぞぉ。

詩紅母はおよと着物の裾で泣き始めた。聖の怒りは受け流されたようだ。

「私、本当は魔界で家族と幸せに暮らしていたのです……。ところがっ――！」

聖はウザそうに、「……いちいち大声だすな！ ご近所に迷惑だろうが……」

「近所関係が最悪のお前が何を言う……」。

「あ、はい。そうですね？　それで、ですね……。ある日は母親に頼まれて、おばあちゃんのお見舞いに行こうとしていたのですね？」

聖は、お前はどこの赤頭巾だと突っ込みたかった。そのせいか、身体がぶるぶると震えている。

ここからは、詩紅母のここにやってくるまでのいきさつである。

ここは、魔界では考えられない平和な人蜘蛛族の村。

詩紅母は家の扉から、外へと出た。

にしてもここは本当に魔界か？　というくらいメルヘンチックな村だ。花とか笑顔で歌ってるし、お菓子の家とかあるし……。

魔界を恐ろしく殺伐としたところだと想像したそこの君！

素直に謝ろう。ごめんなさい。

とにかく、詩紅母は外に出たのだ。

「それじゃあ、お母様、いつてきますね？」

詩紅母が花のような笑顔をこれまた詩紅母によく似た優しげ母親に向けた。

「ええ。気をつけてね？ 寄り道しちゃだめよ？ 悪い悪魔が出るからね？」

だから、赤頭巾ちゃんかよ！！

「分かっていますわ」

詩紅母は母親に手を振り振り、何度も何度も振り返り母親に別れを告げた。

さて、ここは森の中。

「ここは、どこでしょう？」

詩紅母は森に入って10分で早速迷っていた。

「困ったなあ……どっちに行けばいいか分からなくなっちゃった」

詩紅母は辺りをキョロキョロと見回した。しかし、見えてくるのは生い茂る緑ばかり。

このままではおばあ様のお家につけなくなると、詩紅母は涙を浮かべ森を彷徨い始めた。

時折、聞こえてくる鳥達のさえずりで元氣付けられながら、詩紅母は森を進む。

しかし、そんなときに詩紅母の身に不幸が降りかかった。

「何かしら……この音……」

詩紅母の耳にゴウゴウと呻る嫌な音が響いてきた。そうして、次の瞬間！

「えっ！ 何！」

それは、時空の歪だった。この時空の歪は、この魔界と人間界をぐ唯一の通路だった。それが突然発生したのだ。

歪は、強い風で辺りの木々や動物たちを吸い込んでいく。

このままでは詩紅母も吸い込まれてしまう。しかし、時すでに遅し。詩紅母はあっけなく、本当にあけっなく時空の歪に吸い込まれたのだった。

そうして今に至る。

話を終え、詩紅母はまたおいおいと泣き出した。

聖の感想はというと、

「……。」

あきれて物も言えなかった。

「と、言うわけで私は色々紆余曲折あってこうして聖様のお家にたどり着いたのでございます。しかし……この人間界とは酷いところでございますね？ 私を見ただけで、人間さんたちは私を踏み潰そうとするのですから。そんなんでは、動物愛護協会に訴えられますよ！ それに比べ聖様は私を助けてくださいました！ なんてお優しい！ 本当にありがとうございます！」

詩紅母は深々と頭を下げる。

聖が思うに、それはただ単におまえの小ささに誰も気付かなかっただけでは。まあ、虫が嫌いな人間なら潰しにかかるかもしれんがと
か思っていた。

と、暗かった部屋が急にパツと明るくなった。

どうやら、詩紅母の話しはあれで終わりらしい。

「というわけで、お願いします聖様！ どうか私を聖様のお側に居させて下さいまし！ ただ置いていただければいいのです！」

聖は黙っていた。出来れば面倒ごとには巻き込まれたくない……しかし……

聖はちらりと詩紅母を見る。それなりに美人なんだよなこいつ……いや、蜘蛛だけど……こんな美人を見捨てるというのも何か悪い気がする……。珍しく……本当にこんな事何十年に一度あるかないかくらいの奇跡で聖はそう思った。

「……お前、どうやってたらかここからいなくなってくれるの？」

聖は呟くように、しかし、詩紅母に聞こえるようにたずねた。

えっ？と詩紅母は怯えた表情で、聖を見つめる。

「そ、それは……また時空の歪が見つければ帰りますけど……」

詩紅母は俯く。

「……本当にその歪とやらが見つければ僕の家から出て行くのだな？」

詩紅母の顔が驚きにパツと上がった。

「そ、それでは……」

「……勘違いするなよ？ 僕はただ、元の生活に戻るために……がつ……」

「あ、ありがとうございます！！ 聖様！！」

最後まで言い切らないうちに詩紅母が聖に抱きついた。

「な、おい！ ちょっと……人の話しは最後まで……」

「ありがとうございます！ ありがとうございます！ 詩紅母は聖様のために一生懸命お仕えますわ！」

「な、ちょ……苦しい……」

聖の顔が赤染まる。しかし……照れながら、心のそこでやつぱり追出すかとか真剣に思いながらも、聖の表情は誰も見たことがない穏やかな顔つきになっていた。まあ、たまには面倒ごとに巻き込まれてやつてもいいかな。と、聖はこの天然お惚け蜘蛛少女を見てそう思った。

そもそもこの考えが間違いだった。どうして自分はこの蜘蛛女になんて情を見せてしまったのだろうか？ 今でも不思議で仕方ない。

聖はパソコンをいじりながらそんな事を考えていた。

「聖様〜お夕食ができましたよ〜」

詩紅母がやんわりとした口調で、聖に呼びかける。

「まともなもん作っただろうなあ？」

聖が冷たい口調で、パソコンから視線を一旦外して、テーブルの上に並べられた料理を眺めた。

聖の目に映ったのは、質素ながら見た目で美味しそうだわかる御袋の味的な和風料理が並べられていた。一瞬にして聖はその料理に圧倒され、ごくりと喉を鳴らした。幻覚か？ 食材がキラキラして見える。

詩紅母は頭に巻いていた三角巾を外し、はにかみながら聖に告げる。

「ごめんなさい。食材が少なかったもので……こんな質素なお夕食

になってしまったのですが……。聖様のお口に合うかどうか……」

とりあえず聖はテーブルの前に座る。ちらりと詩紅母を見やる。

詩紅母はニコニコしながら……

「聖様、どうぞ召し上がってくださいな」

聖が食べることを促している。

聖は箸を右手に持って、恐る恐る料理に手をつけ始めた。

そうして、口に運ぶ。何回か咀嚼する。

聖の箸が一瞬止まる……

「あ、あの聖様……？ どうしたのですか？ ま、不味かったですか？」

詩紅母が心配そうに聖の顔を覗く。

聖は視線を少し上げて、詩紅母の顔を見つめ返して……

「……美味しい……」

小さく、本当に聞こえるか聞こえないかくらいの声で呟いた。

詩紅母はえっと聞き返す。

聞き返されて、聖は顔を赤くした。

「な、なんでもない！」

誤魔化すように、聖はがつがつと詩紅母の料理を口に運んでいった。不思議そうに首を傾げた詩紅母だったが、聖が自分が出した料理を次々に平らげていく様をみて、ホッと胸を撫で下ろしつつも、微笑ましげにその様子を眺めていた。

「おい！」

「は、はい！　なんですか？」

ずいっと聖はご飯茶碗を詩紅母へと差し出した。

「おかわり……」

顔を赤くしながら聖は小さく呟いた。

そんな聖に驚きながらも詩紅母は笑顔で茶碗を受け取り、

「はい。聖様」

せつせつと茶碗にご飯をよそった。

こうして、二人の平和で微笑ましい夜は過ぎていったのである。

第四笑　彼女の日常、彼の非日常

「いいか？　ぜつつたい！！　この部屋から出るなよ？　僕が帰ってくるまでだ！　いいな、絶対だぞ！」

「はいはい、わかっていますわ聖様」

詩紅母は聖の罵声をニコニコしながら聞き流した。さすがに二週間も一緒に暮らしては扱いも手馴れてきたものである。

聖は言葉を詰まらせ、すぐに詩紅母から目を逸らす。

「と、とにかく……大人しく留守番してろよ？　くれぐれも……いいか？　くれぐれも……」

おかしいことはするなよと言いかけようとして、「はいはい聖様。何もいたしませんよ。あ、これお弁当です」

ニコニコと受け流す。

聖はまたも言葉を失って……言い返せなくなったのか、聖は弁当を詩紅母の手から奪い取って扉を乱暴に閉めて学校へとイライラすつつ向った。

「いつてらっしゃいませえ　聖様」

もうすで見えなくなった聖に明るい笑顔で手を振る詩紅母。

「さて、聖様が帰ってくる間にお掃除を済ませなくちゃ！」

詩紅母は早速、聖との『何もするな!』という命令を破り始めた。

意気揚々と押入れに無造作に仕舞い込んである埃を被っている掃除機を取り出した。

「聖様だったら、お部屋のお片づけをしないのですから……ふふふ。仕方のない方ですわ」

とか何とか言いながら、詩紅母は鼻歌交じりに掃除機のスイッチをオンにした。

数時間後……。時間的にはもう昼になっていた。

粗方部屋が綺麗になると、詩紅母は次にいらなくなった新聞紙や、雑誌などを纏め始めた。

しかし、あの豚小屋のような聖の部屋を此処までよく片付けたものだ。感心してしまう。

と、詩紅母がその纏めた物を家の外に出そうと立ち上がったときだった。

「あら？ こんなところにまだ本が……」

何故かベットの下に本の角が少し顔を覗かせていた。詩紅母は不思議に思いながら、その本を手に取った。

それを手にした瞬間、詩紅母は顔をカッと真っ赤にさせた。

そうして、何を思ったのベットのシーツがベランとカーテンのように垂れ下がっている部分が無造作にばつとめくった。

……そこには――！

さて時は同じくして、ここは聖の通う学校である。

「ひ、聖が……べ、べべべ弁当持ってきてるう――！」

お昼休みの時間。渚が聖の弁当に悲鳴に似た大声を上げていた。

「う、うるさいな……べ、別にいいだろ！ 僕が……その……たまに弁当……持ってきたって……」

「そ、それもそうだけど。で、でも聖はいつもコンビニか、購買でお昼を買ってる人なのに。しかも、確か聖は極度の料理音痴……どうやってお弁当作ったの？」

む、痛いところをついてくるな、幼馴染とは恐ろしくも、面倒な存在だなと聖はそう思った。

さあ、言い訳が難しくなってきた。どうするか……できるだけ、あの女の存在は知られたくはない。

「ど、どうだっていいだろう！ あ、あっち行けよ！」

そくだ、渚をいつものように遠ざけてしまえばいいではないか。そ

れで、弁当をかき込んで……

しかい、今日の渚は一味違った……。

「いや！ 聖のお弁当みてみたい。こんな事初めてだもん」

どうやら、聖が持ってきたお弁当の中身が相当気になるのか、渚は断固として聖の机の前から離れなかった。

「な、なんだよ！」

聖は焦る。まずい……このままでは、弁当をあけることが出来ない……。

ん？ そうか！ 聖はあることに気がついた。

（そうだよ。弁当食わなきゃいいんだ！ よし、そうしよう）

聖は、さりげなく弁当を鞆にしまいこんだ。

しかし、渚はすぐにその不自然な行動を察知したのか、聖からまだ包みを開いていない弁当箱を奪い取った。

「な、何しやがる！」

聖が食って掛かる。

「ねえ、聖。何か隠してない」

どきりと聖は顔を強張らせた。そうして、小さな声で……

「し、してねえよ……」

「本当に？」

ズイツと顔を近づける渚。聖は、うつと顔をしかめる。

「……ほ、本当だよ……」
顔を背けながら言う聖。

渚は納得できない様子だった。

「じゃあ……そういうなら、このお弁当あけてみてよ……」

「え？ いや……それは……」

「出来ないの？」

渚には珍しく物凄い剣幕だ。

聖はそんな渚に圧倒され、仕方なく……渚から弁当を受け取り、結び目を外す。

（くそ……手が震える……ただ、蓋を開けるだけだというのに……）

いつまで経っても蓋をあけない聖に痺れを切らしたのか、渚は告げた。

「もう！ 何してるのよ、もう私があけてあげる！」

聖はあっと、目を見開いた。

世界がスローモーションになった。何秒かして。

パカッと……運命の扉が開いた……。

開かれたその弁当は、二人が驚愕する内容だった……

その中身はというと……まず目に入っただのは、ご飯の上に桜澱粉で描かれたハートの上の海苔で切り張りされたメッセージ……『愛する聖様へ』だった……。

そうして、まるでそのメッセージを飾るかのような可愛い色とりどりのおかず……。

それは誰がどうみても……愛妻弁当だった……。

その瞬間、聖の世界は……氷点下零度の極寒の地になっていた。

渚が、笑顔を引きつらせながら冷え切った声で、こう呟いた。

「聖……これはどういう事……？」

もはや、言い訳ができない。

それでも聖は最後の足掻きと、言い訳を並べる。

「いや、これは……そ、そう。は、母親が作ったんだよ！」

「……嘘だね……。聖のママはお仕事が忙しくて、聖に会う暇がないもん。それに、聖は今一人暮らしでしょ！」

「ぐっ……」

聖は確信をつかれ、言葉を失った。

と、そこに騒ぎを聞きつけてか、加賀屋が面白そうなことになって
るとでも言いたげな表情で聖達のところにやってきた。

「どうした、どうした？ 聖が押され気味とは明日は吹雪か、大嵐
か？」

そんなわけの分からないことをほざきつつ加賀屋は、聖の机の上を
みた。

そうして、一瞬言葉を失い、

「な、なんじゃこりやああああああっ！！」

数秒の大絶叫を発した。

その場にいた全員が耳を押さえるほどの大絶叫。少し離れた人間が、
耳を塞ぐほどだ。側に居た聖や渚にはたまらないだろう。

渚なんて、クルクル目を回している。

キーンと耳鳴りがして、クワンクワンと加賀屋の声が頭を駆け回る
中、聖はなんとか言葉を発した。

「……な、なんだよ……耳元でつかい声を発するな……。身体に
も心にも悪いだろうが……」

そんな事お構い無しに、加賀屋は聖を席から立たせる。

「ちょっと、こっちに來い……」

「な、なんだ……離せっ！ 馬鹿野郎っ！」

加賀屋はズルズルと無理矢理聖を廊下へと引つ立てた。

「なんなんだよお前はっ！」

そんな聖の言葉など意に介さず、加賀屋は聖の肩をガシツ強く掴んだ。

聖は少し動揺しながらも、「……何だよ……」と、小さく呟いた。

「……聖……あれは、なんだ？」

「何って……べ、弁当だよ……」

「そんなもんはみればわかる！ 問題はあの弁当に書かれているメッセーじだ！ 聖、あれは誰が作ったんだ？ 正直に答えろ……」

ようやくいつもの調子を取り戻したのか、聖は離せと無理矢理加賀屋を引き剥がし答えた。

「お前に関係ないだろう！ どいつもこいつも……」

「聖……」

珍しく真剣な表情で、加賀屋は聖を見つめた……。そうして、一言……。

「おめでとう！」

「はっ？」

いきなり加賀屋は聖にそう告げた。一体何がおめでとうなのだろうか……。

意味が分からないと驚いた表情を加賀屋に示すと、加賀屋はニンマリ笑った。

「いやあゝ。お前にもとうとう彼女が出来たかあゝ」

「はい……？」

どうやら加賀屋はあれを本当に愛情弁当だと思い込んだらしい。

「で、いつの間に出来たんだ？ 相手は誰だ？ まあ、あの様子じゃあ、渚ちゃんはないな……誰なんだよ？ 隠さずに教えるよ」

聖はハア……と溜息を吐いた。

そうして、一言……

「お前……馬鹿だろう……」

そうして、聖はけだるげに教室に戻った。加賀屋は、待てよと聖の後を追いかける。

自分の席に戻ると、渚は今の今まで放心していたらしく、聖の姿を見てハッと我に返った。

聖は、仮・愛情弁当を見つめ、そうしてハアと溜息を吐いて、箸を
鞘から取り出し、一口ご飯を口に持っていた。

今だに、渚と加賀屋が問い詰めてきていたが、聖が「うるさい……」
と冷たく言い放つと、その剣幕に負けてか二人は黙り込んだ。

相変わらず、この弁当の主の料理は美味しかった。

聖は帰ったらず即文句を言ってやろうと仮・愛情弁当をかきこん
だ。

そんな、聖の様子を誰が不思議に思わないだろうか……。

渚と加賀屋はお互いの顔を見つめた。

さて、所変わってここはオンボロアパートの『305』号室。つま
り聖の部屋である。

「そ、そんな……聖様が……こんな、こんな破廉恥なものを……」

詩紅母は手に持った雑誌を握り、赤面し、固まっていた。

今詩紅母が覗いている雑誌は、明らかに……×××な雑誌だった。
健全な男性諸君にはこれだけで理解できたであろう。もうこれ以上
は説明の仕様がないので、あまりこの件に関しては突っ込まないよ

うに。

と、突然詩紅母がテーブルの上のつかえているビニール製の紐を半ば、無造作に掴んだ。

そうして、ベットの下の覗く。やはり、暗いながらも何十冊かの雑誌が確認できた。

詩紅母は手を伸ばし、ベットに隠してある雑誌を全て光の当たるところへと掻き出した。

その何十冊かの雑誌を束にして重ね、詩紅母はビニールの紐をそれを括れるくらいの長さにきった。

そうして、重ねてある雑誌を新聞紙を括る要領で結んでいった。

他の本の束にも同じことをしていく。

そうして、その雑誌の束を外に出してある古新聞や雑誌のとなりにおいた。

そうして、パッパと手を払って、部屋に戻った。

その数分後……。

家に帰ってきた聖は驚愕した。

「な、なんだこれは！！　どうなってる！　何故ここに僕の夜のお、

おかずが……」

綺麗にごみとして出されている、『夜のおかず』をみて聖は叫び、赤面する。

「くそ！ きつと、あの蜘蛛女の仕業だな…… 大人しくしてると言つたのに…… ああ！ しかも、保管してあった雑誌まで…… あ、あの女……っ！！」

聖の怒りはとうとう頂点に達した。マボロシか、聖の体が燃えている。

聖は、乱暴にドアを開き、入るなりいきなり怒鳴りつけた。

「おい！」

「あ、聖様。お帰りなさいませ」

相変わらず詩紅母は動じず、ニコニコと笑顔だった。

「これ、どういう事だよ！ 何勝手なことしてるんだ！ 僕は大人しくしていると言ったはずだぞ！」

詩紅母は小首をかしげる。

「へ？ 私は何もしていませんわ？ 聖様がおっしゃったように、お部屋で大人しく過ごしていましたが……」

「じゃあ、これはなんだ！」

聖は手に持っていた雑誌を、さながら水戸 門の印籠のように詩紅母へと突き出した。

詩紅母はあぁと感嘆の声をあげ答えた。

「今日お部屋のお掃除をしたんです。それで、その雑誌などがお部屋のお邪魔をしていたので、片付けたのですよ。どうですか？ 綺麗になったでしょう？」

詩紅母はのんびりとした口調でそう告げた。

その瞬間、聖の中で何かがプチリと切れた……

「な、何が綺麗になった……ふざけるなよ……。僕のオアシスのことごとく壊しやがって……。お前何様のつもりだ！ 勝手なことするな！」

「あ……。も、申し訳ありません……」

詩紅母はうなだれた。

しかし、それでも聖の怒りは止まらない。

「それから、なんだあの弁当は！ おかげで周りの連中に誤解されただろう！」

「あ、あの……感謝の気持ちを込めたつもりだったのですが……ま、不味かったですか？」

「その感謝が迷惑なんだ！」

聖は詩紅母に鋭く、冷たく言い放った……。

詩紅母の瞳に涙がわいた。

「わ、私は……聖様に喜んでいただこうと思って……」

そうして、聖はとうとうトドメを刺す言葉を詩紅母に投げかけた。

「それが迷惑だって言ってるんだよ！」

その言葉は詩紅母の胸の深い部分に刺さった……。気がつくと、詩紅母の瞳からは大粒の涙が流れていた。

聖もさすがに、しまったと口を押さえたがもう遅かった。

と、詩紅母が無言でエプロンと三角巾を外した。

「ごめんなさい……聖様……」

聖は何も答えられなかった。

その日、二人はずっと黙っていた。

さすがに、あの後では気まずいのであろう。

夕食も、寝る時ですら詩紅母は何もいわなかった。

聖は何故か違和感を覚えた。この天然すつとぼけ蜘蛛少女が静かになって、自分の生活が元に戻り始めているというのに聖は落ちつかなかった。

自分はどうしたのであろう。どうしてこんなに後ろ髪を引かれているのだろうか。

わからない。

青年は気がついていなかった。

詩紅母を×××になつてることを……

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7150d/>

スパイシー・スパイダー

2011年1月13日03時11分発行